



ツルの災いはわたしたちへの警鐘

理事長 百瀬邦和

昨年に続き今冬も、鳥インフルエンザによるタンチョウの感染死が確認されました。ツル類で大規模感染が発生したのは2年前（2021年）のイスラエルが最初でした。イスラエルでは野生のクロヅルへの給餌に使った家禽用の餌が感染経路だったようです。昨シーズンは鹿児島県・出水平野でのナベヅル・マナヅルで鳥インフルエンザが確認されましたが、同地の鶏舎内で確認された鳥インフルエンザとは別系統のウイルスだったとのことなので、お互いに直接・間接の接触は無かったようです。しかし、COVID-19ウイルスのように感染の発生源が推測できていない状況には変わりはありません。要するに鳥インフルエンザウイルスは世界のどこにでもあり、何時、何処で大量感染がおきてもおかしくない状況であるということでしょう。

本会の顧問で、本紙に毎号エッセイを寄稿していただいている石弘之さんによれば、人類の歴史はウイルスと共にあったということなので、当然ツルを含む鳥類もまたウイルスと共に生きてきたこととなります。鳥インフルエンザ対策に関していうならば、私たちがCOVID-19の発生以来数年間続いた感染対策は、ツルの鳥インフルエンザ対策の参考になるでしょう。それと同様に、野生下のツルたちのウイルスへの反応やその生き方などから、私たちが学べるのが沢山あるはずです。

そのような柔軟な視点を持つことは、ツルを保護するという一方的な関係性ではなく、ともすれば私たちが意識して来なかった、今の地球で人とツルが同じ生き物として共に生きていくことにつながっていくのだと思います。

本紙の中で紹介したエストニアでの会議と、その前後に見てきた当地の市民社会の様子を振り返りながら、私はタンチョウで発生した鳥インフルエンザ感染の事例を有効に活用できないかと模索しています。

巻頭言

・・・1

タンチョウが鳥インフルエンザに感染しました

・・・2

エストニアで開催された国際ツル会議ほか

・・・3

<連載>

鳥と自然と人[®]

・・・7

<活動記録>

・・・8

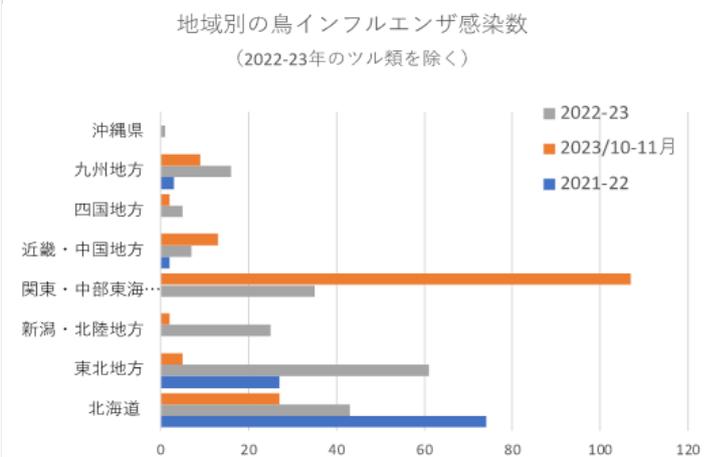
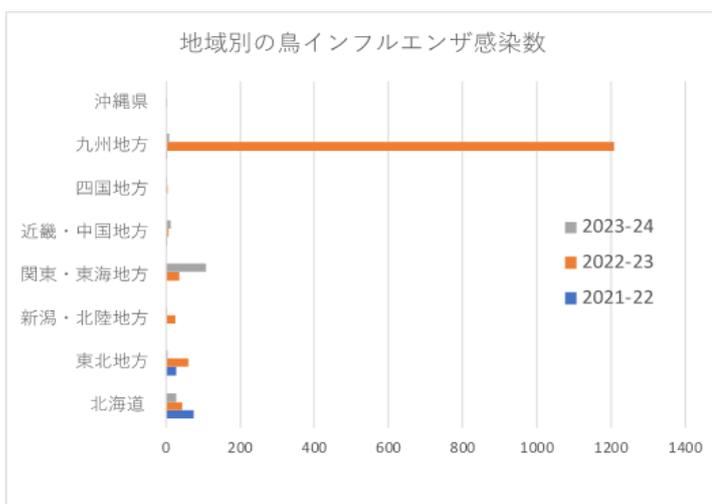
タンチョウが鳥インフルエンザに感染しました

Red-crowned cranes infected with avian influenza

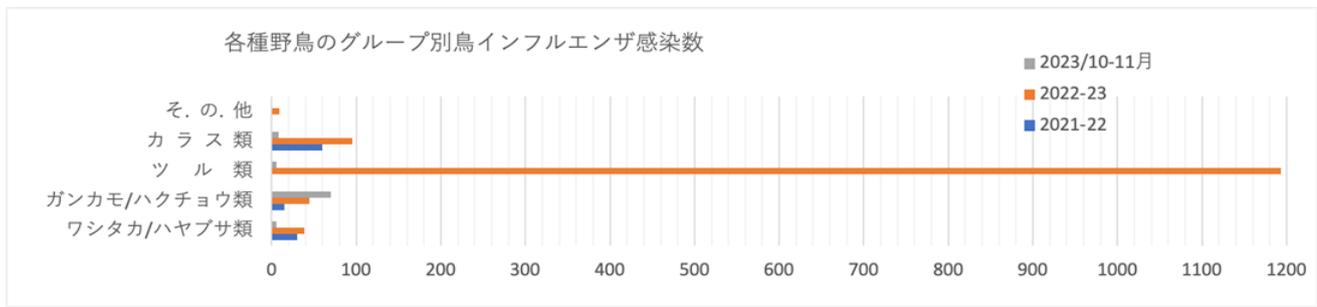
今年も鳥インフルエンザに感染したタンチョウが見つかってしまいました。しかも今年は11月末現在で既に5羽が死体で発見され、うち4羽がH5N1亜型の陽性だったと発表されています。4羽のうち1羽は2羽が並んで死亡発見されましたが、検査は1羽しか行っていないので、実際は5羽が陽性だったと判断して良いでしょう。

環境省の資料によれば、昨冬は鹿児島県の出水市でナベヅル1139羽、マナヅル50羽が死亡しました。さらに2年前の2021-22年の冬にはイスラエルで約8000羽のクロヅルが死亡したとのニュースが流れました。そして今年ハンガリーで1万羽以上のクロヅルで鳥インフルエンザの感染が続いています。近年は毎年世界のあちらこちらでツルの大量感染死が発生しているようです。そんな中で、11月に根室地方北部で相次いで発生したタンチョウの感染死は、昨年の1羽から5羽に増えたことから、今後の感染拡大が懸念されます。これまでの標識調査によって、根室地方北部で繁殖したタンチョウは、標茶町や鶴居村の大きな群れに合流して越冬することが判っているからです。仮に根室地方北部で鳥インフルエンザウイルスに感染し、まだ発症していないタンチョウが移動すれば、集団越冬地で感染を拡大させてしまう可能性があります。正に4年前に世界中に感染が広がったCOVID19の時と似ています。ウイルスによる感染症という点も同じですから、その対策についても基本的には同じはずですが、しかし、COVID19と比べて厄介なのは、うがい・手洗い・消毒・行動規制そしてワクチン接種などが望めないことです。唯一の対策としては感染個体の早期発見、早期隔離ということになりますが、野外を自由に飛び回っているタンチョウが相手では、それにも限りがあります。実際には発症して飛べなくなった個体、死亡した個体を発見して可能な限り速やかに保護・回収することになるでしょう。大きな給餌場に集まった中で発見されるのではリスクが大きすぎます。

そこで、タンチョウ保護研究グループでは昨年以上の監視を行っています。これまでに標識個体のなどの情報を寄せていただいた60名程の方々に監視活動への協力を呼びかけるとともに、スタッフやボランティア協力者による十勝・釧路・根室地方での巡回監視を行っています。また、昨年は4台だった監視カメラを6台に増やして、音別川、阿寒川、釧路川、チャンベツ川、俵橋湿原の給餌用ニオ（中標津）などに設置し、ネットで送られてくる画像を毎日チェックしています。



上のグラフは、環境省が発表している鳥インフルエンザに感染・収容した野鳥一覧から、今シーズンを含めた過去3年間の記録を地方別に集計したものです。2022-23年シーズンは鹿児島県出水市一帯で起こったナベヅルとマナヅルの大規模感染によって他の地方の様子が見えにくい（グラフ左）、ツル類を除いたグラフ（右）で比較してみました。全体としては北海道、東北、そして関東・中部・東海の東日本で多く発生しているようです。今年（2023）のデータは11月末の段階で比較しているのですが、既に昨シーズンに近い数が収容されています。



それでは鳥の種類についてはどうでしょうか。やはり2022-23年シーズンの鹿児島県で起こったツル類の大規模感染が飛び抜けていますが、そのほかのグループではカラス類、ハクチョウを含むガンカモ類、ワシタカ・ハヤブサ類の数字が高いのが目につきます。それ以外のグループ（上記グラフでは「その他」）の発生はごく一部に留まっていると言えそうです。カラス類とガンカモ類は個体数の多いグループですが、ガンカモ類はツル類と生息環境が重なっており、以前から注意が必要との声が出ていました。今年11月に千葉県で感染した43羽（検査は1羽のみなのですが一緒に死んでいた総数）は大量死と言えるのかもしれませんが。カラス類はそのほとんどがハシブトカラスです。カラス類の中でもハシブトガラスは肉食の傾向が強いとされていますから、鳥インフルエンザに感染して死亡したカモなどを食べたことで自らも感染してしまった可能性が予想されます。他のグループに比べて遥かに全体数の少ないはずのワシタカ・ハヤブサの仲間が比較的多く感染しているのも同じ理由なのかもしれません。北海道のタンチョウは、冬の餌場である給餌場や牧場周辺、そして畔の河川などでもガンカモ類やカラス類と一緒にいることが多く観られますから、互いの感染リスクは高いと言えるでしょう。

厄介なのは、鳥の種や系統によって鳥インフルエンザに対する耐性に違いがあると考えられるのですが、人間の場合のように研究が進んでいないこと、そして何よりウィルス自身が刻々と変化しているはずのものですから、タンチョウについても、その感染力、影響力（毒性）等はなかなか予想が難しいところです。今は人のインフルエンザへの対策を参考にして、できることを可能な限り精一杯行うことでしょう。

エストニアで開催された第10回国際ツル会議に参加しました

百瀬 邦和

Participated in the 10th International Crane Conference in Estonia

今年8月21日から27日にエストニアのタルトゥ市にあるエストニア生命科学大学（Estonian University of Life Sciences）で開催された国際ツル会議に参加してきました。この会議は昨年秋に開催予定だったのですが、コロナ（新型インフルエンザ）の流行とウクライナ戦争の影響で延期されていました。

- 1985, Oroshaza - Hungary
- 1989, Tallinn - Estonia
- 1994 Adenex, Spain
- 1996, Stralsund - Germany
- 2000, Verdun - France
- 2003, Flämslätt, Sweden
- 2006, Hortobagy - Hungary
- 2010, Stralsund - Germany
- 2014, Gallocanta - Spain
- 2018, Arjuzanx - France
- 2023, Tartu - Estonia

講演の中で紹介された過去のヨーロッパツル会議事務局では1989年のTallin - Estoniaを第一回としているようです



会場の大学施設には大学の旗、エストニア国旗、そしてEUの旗が掲揚されていました

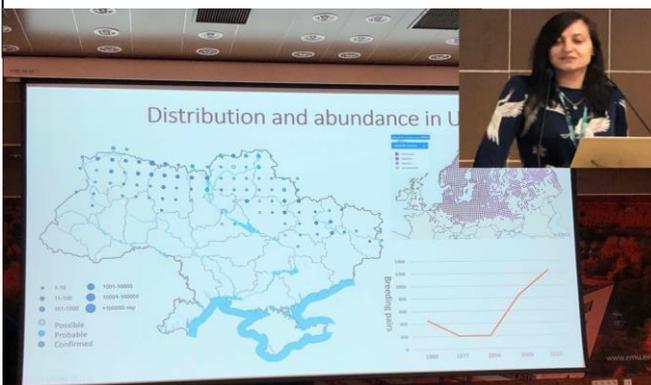
2006年のハンガリーでの会議以来4回目の参加でした。今回の会議にはヨーロッパを中心に20ヶ国から79名の参加がありました。参加者の国別内訳はドイツの19名、スペイン14名、スウェーデン9名、フランス8名など、

ヨーロッパ圏からが多く、それ以外の地域からは会議を共催しているICF(USA)のほか、ジョージア、イスラエル、ケニア、ベトナム、日本でした。今回の会議はウクライナ戦争の最中での開催であったため、毎回数人の参加者があったロシアからの参加は無く、直前まで参加が予定されていたモンゴルとエチオピアの参加者はビザの関係で不参加となってしまいました。



第10回会議のシンボルマーク
2階にある会場の案内は、建物入り口を入ったところのこのサインだけでした。

演壇で話すエストニア大学のIvar Ojaste博士。会議の開催事務局と責任者を一手に担っていました。彼が待ちうけ画面として使っていたこのスライドが、エストニアという国とこの会議の意図がよく出ているように感じて、私はとても気に入りました。



ウクライナを代表してスイスから駆けつけて発表したTachianaさん。素敵なツルのデザインのドレスを着ていました。彼女は初日には同じく黒地にエストニア国鳥のツバメをデザインしたドレスを着ていました。この会議に参加し発表することに、祖国への強いメッセージを込めていたことが感じられます。

会議は22日から25日までの4日間行われました。環境省（Ministry of Climate）と開催大学学長による挨拶に始まり、会議主催者等による今回の会議全体の意味に関する講演、参加者による発表、ツルのカラーリングとドローンによる調査をテーマとしたワークショップ、アートプログラムとして複数のスライドショーや動画の放映などがありました。途中に半日間のエクスカーション、夕方早い時間からの場所を変えてのエクスカーションを兼ねたオフィシャルディナーなどもあり、盛りだくさんの発表でした。

発表の休憩時間やバスでの移動中などには、親しく笑談したり、情報交換や意見交換、さらには新しいプロジェクトの提案や打ち合わせなど、むしろ皆こちらの方を目的に集まったように見えました。コロナが流行してから多用されているWEB会議にはない、こうした直接顔を合わせての時間的なゆとりを持った今回の集まりは、ツルの会議の目的を意識したのもあり、私にとっては講演の内容以上にとても得るものが多く、印象深いものでした。会議の目的については、冒頭の挨拶、基調講演の中でも何度も強調されていましたが、各地の研究発表等によってツルそのものを知ることとともに、各地の仲間たちがツルを介して繋がりを強めることとされていました。会議を締める最終公演は、ヨーロッパ・ツル研究会を牽引しているIvar Ojaste、



昼食の様子。ホールでは食事中も交流が盛んで、まるで食事付きミーティングのようでした。

(エストニア)・Günter Nowald, (ドイツ)・Alain Salvi, (フランス)の連名による「自然保護、ツル、そしてツルキチ(craniacs)の役割」でした。

会議の構成と参加者たちのツルの見方が判るように思いますので、発表タイトルを以下に紹介します。

＜国際ツル会議の開催にあたって＞

- ・環境省 (Ministry of Climate) からの挨拶
- ・エストニア生命科学大学学長の挨拶
- ・亡くなった私たちの仲間たちについて
- ・会議開催に当たって
- ・エストニアについての紹介

＜基調講演＞

- ・ツルの国際会議について
- ・50年間の世界的なツル保護戦略と影響
- ・クロヅルの移動生態学：飛翔と移動、腸内細菌叢から人間と野生動物の衝突、鳥インフルエンザの大流行まで

＜セッション：希少種の保護＞

- ・北米におけるアメリカシロヅル再導入の20年
 - ・東アジアにおけるヒガシオオヅルの保護
 - ・東アフリカにおける絶滅危惧種ホオジロカンムリヅルの保護のための応用研究の概要
 - ・東アフリカにおける国境を越えたツルの保護
 - ・エチオピア、リフトバレーの湿地帯におけるホオカザリヅルの繁殖個体数と保全上の課題
 - ・季節性と環境変化がツルの個体数に及ぼす影響：エチオピア、ガンベラにおけるカンムリヅルの個体数密度の事例
 - ・土地利用 土地被覆の変化と一般市民の認識はカンムリヅルの保全に異なる影響を与える：エチオピア南西部のジンマ地帯からの証拠
 - ・土地利用変化の勝者と敗者：世界のツルと農業との相互作用に関する系統的レビュー
 - ・適切なツールだけで解決できるとは限らない (ICF)
 - ・農作物への被害リスクを軽減するためのクロヅルとハイロガンへの振替え給餌 (diversionary feeding) に効果はあるのか？
 - ・ケニア西部におけるツルの現在の減少を逆転させるための気候変動に対応した農業の推進
 - ・ウガンダにおけるホオジロカンムリヅルの中毒の現状と現在の緩和策
- ## ＜セッション：ツルの個体群と渡り＞
- ・エチオピアと南スーダンの境界地域におけるカンムリヅルの季節的移動と課題
 - ・タナ湖周辺湿地におけるカンムリヅルの営巣生態
 - ・ブータンにおけるオグロヅルの調査と保護：渡りについて
 - ・ヤクーチャにおけるソデグロヅルの東部移動ルートの国際モニタリング調査
 - ・北海道で標識されたタンチョウの追跡調査
 - ・ヨーロッパのクロヅルの人口動態を理解する：カラーバンディングと再確認データからの洞察

- ・チェコ共和国におけるクロヅル、標識されたツルの行動と移動パターンの変化
- ・ドイツ北部の繁殖地におけるクロヅルの孵化後の家族行動
- ・ツルのつがいにおける深い洞察
- ・捕食者と被食者、ツルその他の泥炭地の鳥たち
- ・フィンランドのクロヅル-営巣と渡り
- ・フェノスカンジヤ地方Fennoscandiaで繁殖するクロヅルの渡り経路
- ・右岸ウクライナ・ポレジアPolesia地方のクロヅル
- ・エストニアにおけるクロヅルの個体数調査から得られた知見
- ・ハンガリーにおけるクロヅルの渡り
- ・ドイツのツル個体群-新たな洞察
- ・1970年代から現在までのフランスにおけるクロヅルの状況の変遷
- ・フランス中部におけるクロヅルの越冬の拡大
- ・アルジュサンクス国立自然保護区におけるクロヅルの越冬行動：15年間のモニタリング
- ・ピレネー山脈を渡るクロヅルの春の渡り
- ・イベリア半島におけるクロヅル個体群の拡大 (2013年/2023年)
- ・自然保護、ツル、そしてcraniacs (ツルキチ) の役割

＜ポスター発表＞

- ・フィンランドにおけるクロヅル (*Grus grus*) の標識と回収
- ・アルジュサンクス国立自然保護区National Nature Reserve of Arjuzanxにおける一般市民の受け入れ：地域住民の受け入れとクロヅル (*Grus grus*) の適切な保全のための重要な要因 (フランス)
- ・クロヅルの卵殻中の重金属残留物 (ドイツ)
- ・ライオン湾とジェノバ湾の間の地中海沿岸における、繁殖前ピーク時のクロヅルの渡りに作用する気象要因 (イタリア)
- ・役割の分担と眠れぬ夜 - クロヅルの卵への脅威 (ドイツ)
- ・ジョージアにおけるクロヅルのモニタリング調査：1991-2022 (ジョージア)

＜ワークショップ＞

“ツルのカラーリングとドローンによる調査”

＜ART PROGRAMME＞

- ・音楽付きスライドショー「魅惑の鶴」
- ・スライドショー「ツルを楽しむ」
- ・Film 「風の向くままに」
- ・Film 「風に刻まれた大地」

第10回国際ツル会議の発表より 百瀬 邦和

From a presentation at the 10th International Crane Conference Kunikazu Momose

エストニアで開かれた会議の中で、私が特に興味深かった発表の一部を紹介します。紹介した写真とグラフは、タンチョウのもの以外は著者によって会議で発表されたものです。

<ドイツのツル個体群-新たな洞察:A. Lehmann, G.Nowald>

ヨーロッパでツルといえばクロヅルのことで、かつての英名はCommon Craneと呼ばれていたほどです。ドイツでは以前は北東部で少数が繁殖していたようですが、近年はバルト海に面した北部を中心に分布が拡大して、西部はオランダ国境付近まで到達し、南方向へはケルンの位置する概ね中部地方まで繁殖地が広がっています。そして、一部はオーストリアとの国境のあるアルプス山麓でも記録されているそうです。発表では広い国中の毎年の繁殖つがい数とその分布が示されていて、私は、さすがにドイツ=（ドイツ）ツル保護協会だと感心したのですが、発表の中で示されたドイツ国内でのクロヅルの繁殖つがい数のグラフ（下図左）にはさらにびっくりしました。繁殖つがい数の総数は12000つがいと北海道のタンチョウの場合（下図右）とは比較になりませんが、増加していく様子が似ているのです。また、冬のタンチョウ確認数のグラフとも驚くほど似ています。ドイツ、あるいは北ヨーロッパにおけるツルをめぐる状況は複雑なのでしょうが、少なくとも1970年代以降の個体数の急増は、北海道のタンチョウだけの特殊状況ではないということだけは確かなようです。

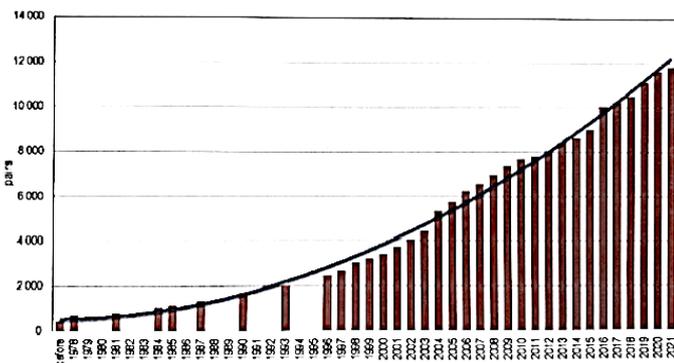
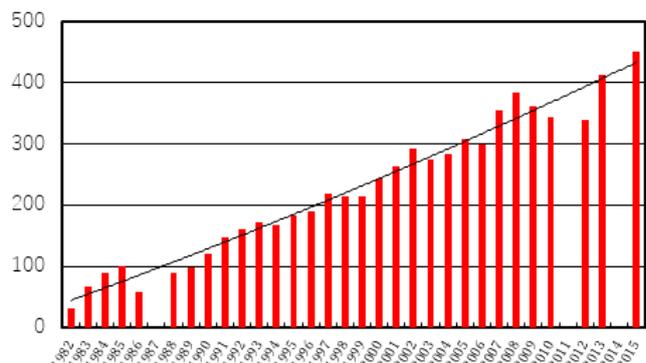
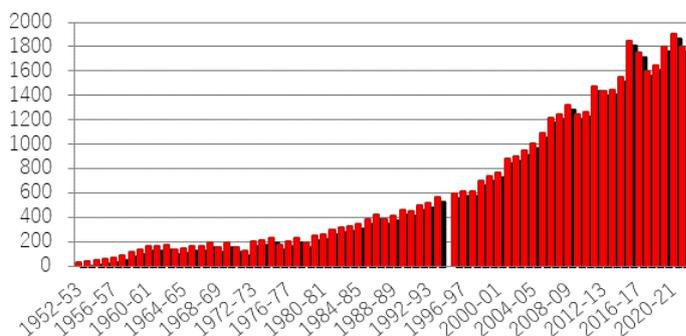


Figure 1: The breeding population development of the Common crane in Germany from 1977-2021.



北海道のタンチョウの繁殖つがい数の推移 (1982 - 2015)

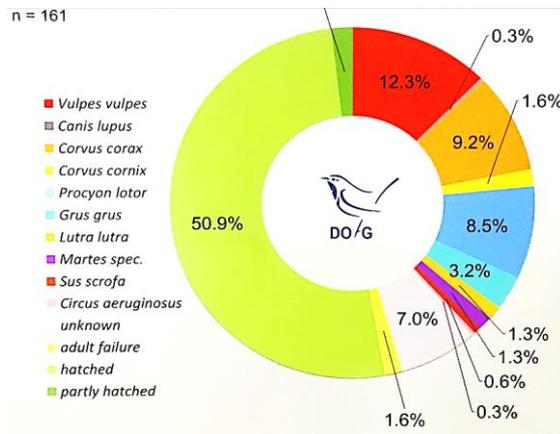
北海道で確認されたタンチョウの総数



<役割の分担と眠れぬ夜 - クロヅルの卵への脅威(ドイツ) :I. Barwisch, W.mewes, A.Schmitz>

抱卵中のクロヅルの巣に仕掛けた監視カメラの記録を整理したポスター発表です。161の巣の卵を対象にした記録で、捕食の第一位は何とオオカミだったようです。次いで、カラス類、アライグマ、（親でない）クロヅル、カワウソ、テン、チュウヒ、キツネ、イノシシなどがリストに上がっています。オオカミ・カワウソ・イノシシは北海道にはいませんが、タンチョウの巣（卵）の捕食者を予想するためには興味ある記録です。さらに、卵が無事に孵化したのは50%強だったというのは、卵の捕食者が意外と多いためでしょうか？タンチョウでの比較できる資料はありませんが、卵の孵化率はまだ高いと思っています。

(次ページグラフ参照)



<ジョージアにおけるクロヅルのモニタリング調査：1991-2022(ジョージア)：A. Abuladze >

ウクライナ戦争の現場である黒海の南東にあるジョージアはトルコとロシアに挟まれた山岳地帯の国です。ここでは同地方（コーカサス地方南部）だけに住むクロヅルの亜種 (*Grus grus archibaldi*) の貴重な繁殖地です。このポスター発表は同亜種の現状についてだったのですが、私はこのポスターの中に不自然な写真（手のひらに載せた白い丸い粒の塊）を見つけました。そこでAbuladze氏にこれは？と聞いてみたところ、雹だということです。写真のコーナーでは繁殖を妨害する要因について紹介していましたが、羊の群れの放牧や犬と並んで天候の急変による雹の被害があるということでした。雹が日常的にツルの繁殖に影響を与えているということが驚きでした。現場の標高が1800~2000メートルだということなので、*G. g. archibaldi* は厳しい山岳気象の中で繁殖しているのだと改めて感じたところです。さらに高山で繁殖しているオグロヅルにもこのような現象はあるのでしょうか？主に低地で繁殖するクロヅルが高山で繁殖することによってオグロヅルに変わっていったのかもしれないと思うと、この*G. g. archibaldi* の形態が北ヨーロッパで繁殖している*G. g. grus* と少し違っていることと併せて、その繁殖環境やそれに適応した生態などにも興味が湧いてきます。



<連載> 鳥と自然と人⑱ 都心のカラスが減っている

石 弘之 (本会顧問)

Birds, Nature and people #18

東京・世田谷区の自宅でカラスと長い戦いを続けてきた。ちょっと油断すると生ゴミが道路いっばいに散らばる。繁殖期に近くの並木道の下を通っていたら、急降下してきたカラスに頭に一撃をくらいそうになったこともある。

ところが、この十数年でわが家の周辺でまったくといってよいほどカラスを見かけなくなった。カラス研究に取り組む宇都宮大学の塚原直樹さんによると、都内約40カ所の合計生息数は2001年度には約3万6400羽だったのが、22年度は約8700羽と約76%も減っていたという。都庁に寄せられたカラスに関する苦情・相談件数は01年度に比べて約91%も少なくなったようだ。

研究者らでつくる「都市鳥研究会」が、明治神宮（渋谷区）、豊島岡墓地（文京区）、国立科学博物館附属自然教育園（港区）の3カ所のねぐらで、1985年から5年ごとに追跡調査を続けてきた。その結果、ねぐらに集まる羽数は、20年前のピーク時に比べ7分の1に減っていた。

東京都が毎年12~1月に都内40カ所で行っている調査でも、カラスの数は減少傾向にある。最も多かった01年度の3万6400羽から、20年度には1万1000羽まで減った。都市鳥研究会都代表の唐沢孝一さんによると、減少の理由に ① エサになる生ゴミなどの減少、② ごみの収集時間などカラス対策が浸透、③ 天敵のオオタカなどの増加、を挙げている。

カラスが減るのはうれしいが、都内のスズメやツバメも90年代に比べて3~4割減っているらしい。庭にやってくる野鳥のトップは、ついにスズメからシジュウカラになってしまった。これはちょっとさびしい。

<活動記録> (2023年8月～11月)

- 8月2日 十勝地方の繁殖状況調査
- 8月4日 運営会議6名参加
- 8月7日 会報 Tancho49号発送
- 8月14日 事務所のコンピューターシステム交換(澁谷、百瀬)
- 8月18日～29日 エストニアで開催された国際ツル会議に参加(百瀬)
- 9月8日 運営会議5名参加
- 9月9日 釧路警察署のタンチョウ交通事故防止PR活動に参加(百瀬Y)
- 9月13日 TKG75号 発送
- 9月30日 俵橋湿原に設置するニオ用のデントコーンの刈り取りと運搬(大河原、福田、百瀬)
- 10月4日 俵橋湿原にニオ設置(大河原、福田、工藤、高橋、松野、百瀬)
- 10月6日 運営会議5名参加
- 10月18日 阿寒中学ツル委員会で講話(百瀬)
- 10月19日～23日 サロベツ湿原でのタンチョウ標識調査に参加協力(百瀬、住吉、高田)
- 10月29日 生物談話会・釧路市博物館友の会の例会にて講演(於:釧路市博物館 百瀬)
- 10月31日 別海町の鳥インフルエンザ発生地での現場確認と周辺地位域の巡回監視(百瀬)
- 11月2日 阿寒川と音別川に鳥インフルエンザ感染個体監視のためのカメラを設置
- 11月6日 中標津の酪農試験場でトウモロコシの寄贈を受け、俵橋湿原のニオに補充(百瀬、大河原、松野)
- 11月10日 運営会議6名参加
- 11月10・12・16・19日 鳥インフルエンザ感染個体の巡回監視(富山)
- 11月12日～15日 サロベツ湿原でのタンチョウ標識調査に参加協力(百瀬、住吉、高田)
- 11月29日 約60名の情報提供者に鳥インフルエンザ感染個体監視への協力お願い(メールにて文書を発送)

タンチョウ保護研究グループの最新情報をご覧ください。
フォローをよろしくお願いいたします。

ホームページ



instagram



Facebook



< 会員 > (11月30日 現在)

会員数 : 156名 (運営会員 : 24名、個人サポート会員 : 132名 (卵83、ひな 46、若鳥 2、成鳥 0、終身 1))

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

TANCHO

Fiftieth issue December, 2023

<表紙写真 Cover photo>

興部川で越冬中の3羽

429を含む、この若い3羽は今年1月後半までオホーツク地方北部の興部川の中で過ごしました。

撮影者 : 黒澤 徹也(興部町)

認定特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp

URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213